



世界各地で大地震が続いています。死者・行方不明者が8万7千人を超えた2008年の中国・四川大地震、22万人以上が亡くなった行方不明になったりした04年のスマトラ沖地震。今年に入ってからハイチやチリで発生。1月12日のハイチ大地震では、20万人以上の死亡が伝えられています。

家の倒壊や火災、津波で多くの子どもが命を失ったり、けがをしたりしました。親やきょうだいを失ったり、心の傷を負った子どももいます。最貧国であるハイチでは、子どもは強制労働や売春を目的とした人身売買のターゲットにもなっています。

心身ともに傷ついた子どもたちをどうやって救うのか。ハイチの現状とともに、発生から15年を迎えた阪神大震災の今を調べ、自分たちにできることを考えました。

ひろしま国は子どもたちが生きる希望にあふれた理想の国です。国境はありません。公募したジュニアライター20人が、平和に生きることをテーマに取材・執筆をします。

第67号 ■ 震災と子どもたち

心の復興 みんなで後押し

◎なるほど キーワード

ハイチ大地震 1月12日早朝(日本時間13日夕)、首都のポルトープランスから南西15キロを震源に起きた。マグニチュード(M)は7.0。レンガの壁など耐震性の低い構造の建物が多かったこともあり、20万人以上の死亡が確認されている。崩れた建物の下敷きになっている遺体もまだあり、被災者総数は、人口の約30%にあたる約300万人に上る、という。

ハイチ

被災した少年を診察する医師たち (AMDA提供)



医療ピンチ 治安悪化

まずは励ましの手紙を

多くの建物が倒壊したハイチの首都ポルトープランス。「がれきの下には多くの死体があり、街に死臭が漂っていました」。地震直後から約3週間、現地に滞在した国際医療ボランティア団体AMDA(岡山市北区)の調整員ニッティアン・ビーラバークさん(41)はショックを隠せない口調でした。衛生状態が悪く子どもたちには下痢がはやっていたそうです。

ハイチでは普段から国民の70%以上が1日2ドル以下で生活しています。その多くは非政府組織(NGO)や、米国、カナダにいる家族、友人の援助を受け暮らしていました。地震で人々は家や財産を失い、食べ物の取り合いが起きました。疲労と空腹で暴力的になり治安はますます悪化の一途をたどっています。

病院の多くが倒壊し、残った病院には患者が殺到しました。衛生状態が悪く、薬や器具も不十分で、感染症などの恐れから約4千人が手足を切断したそうです。AMDAは彼らに義肢を贈るプロジェクトを検討中です。

貧しさから両親に暴力を受けたり放置されたりする子どもが少なくありません。多くの子が親を失いました。街には孤児があふれています。治安が悪いので外で遊ぶのにも危険が伴います。

これから雨期に入ると外で遊べません。人形や筆記用具など子どもたちが中で遊べるようなものが必要になるでしょう。「励ましのメッセージや絵を送るだけでも彼らは勇気づけられる」とビーラバークさんは提案しています。

(高2・見越正礼)

地震で父親を亡くし、ビニールシート1枚の下で暮らす母親と子ども5人 (ピースウィンズ・ジャパン提供)



住まい不足 助け合い

忘れないことが大切

2月6日から約3週間、ハイチの首都ポルトープランスに滞在していたNPO法人ピースウィンズ・ジャパン尾道事務所(尾道市)の向井真珠さん(29)は「ハイチが好きになった」と笑顔で語ってくれました。行くまでは、暴動や強奪など悪いイメージしかなく、「とても遠い国だった」と言います。

現地スタッフには、被災民キャンプで暮らす人や、3日間もご飯を食べられずにいた人たちもいました。牧師団体は、子どもたちに1日1回の食事を提供。「アジア圏で見られる助け合いの文化がハイチにもあった」と驚きました。

「ハイチの子どもたちに必要なものは、親と一緒に雨風しのいで住める場と勉強できる場」と向井さん。壁のないビニールシートの下に暮らし、雨が降ると立ったまま寝ないといけない家族もいました。ピースウィンズ・ジャパンでは、家族向けテントの配給や壊れた校舎のがれきの撤去、授業ができるテントの用意をしようとしています。

日本の学生にできることは何でしょうか。今は治安も悪く、行くのは危ないそうです。しかし、住宅建設が始まったらボランティアが必要かもしれません。「それまでハイチのことを忘れずにいてほしい」と語気を強めました。

(高2・古川聖良)



神戸

◎なるほど キーワード

阪神大震災 1995年1月17日早朝、兵庫県淡路島北部を震源に起きた。マグニチュード(M)は7.3。6434人が死亡、建物約10万5千棟が全壊した。最大で約33万人が小学校の体育館などでの避難所生活を強いられた。新幹線